

[27]

氏名	おおつか りか 大塚 理加
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学位記番号	安全博第25号
学位授与の日付	2023年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	高齢化する社会における防災・減災に向けた 実証研究 —高齢者の災害レジリエンス向上のために—
論文審査委員	主査教授 永松 伸吾 副査教授 高鳥毛 敏雄 副査教授 越山 健治

## 論文内容の要旨

本研究は、災害時に高齢者がなぜ弱者となるのか、高齢者を弱者としないためにはどのような体制づくりや対応が必要となるのかについて、筆者が自ら行ってきた定量的・定性的な実証的な研究成果をもとに考察を行い、今後の災害対策に寄与しようとするものである。本研究の構成とそれぞれの概要は以下のとおりである。

第1章では、人口の高齢化は日本だけではなくグローバルな社会現象であることや、人口の高齢化に伴い、たとえ災害直後を生き延びたとしても、その後の災害過程において健康を害し、生命を失ういわゆる関連死が問題になってきていることを指摘している。そしてそれらは、単に加齢による身体機能低下のみに起因するものではなく、社会的な要因により決定されているものであることから、災害対応の方策によって高齢者の減災につなげることができることと論じ、本研究に通底する問題意識を示している。

第2章では、高齢者が被災による影響を受けやすい理由について明らかにしている。高齢者世帯において、独居割合が年々増加傾向にあり、災害対応における地域支援の重要性が高まっていることや、高齢者内部での脆弱性の格差が大きいことなどを指摘している。また介護保険制度の導入により、在宅で生活する者が多くなってきており、災害時に支援者を必要としている者が増加していることを指摘している。

第3章は、高齢者の災害への事前準備の促進について計量分析をした結果を示している。ロジスティック回帰分析を行った結果、教育歴が低い高齢者や、独居高齢者などにおいて災害準備の行動が低下していることが明らかにし、これが高齢者の脆弱性を高めている一つの要因であることを明らかにしている。また地域高齢者の避難訓練の参加に関連する要因として、口腔機能の低下や手段的日常生活動作の低下している者において避難訓練の参加を

低いことを明らかにしている。

第4章では、高齢者の応急対応における課題を検討している。施設入居高齢者に関して、令和元年の台風15号において被災した高齢者施設に対する質問紙を用いた調査を行い、そのデータのロジスティック回帰分析結果から、食事の継続的な提供がなされていることが、高齢者の体調の悪化防止に重要な要因であるとの結論を得ている。また地域包括支援センターを対象とした分析から、地域高齢者に関しては在宅医療・介護サービスの継続的な提供が必要であることを明らかにしている。

第5章では、高齢者の避難生活への支援課題について示している。東日本大震災の被災地における大規模仮設住宅団地の65歳以上入居者を対象とした調査により、人的なつながり、とりわけ話を聞いてくれる友人の存在などが、高齢者の健康の維持に有意な影響を与えていることなどを明らかにしている。

第6章では、高齢者の復興期の課題について、東日本大震災で被災した自治体の社会福祉協議会職員や支援団体、仮設住宅の自治会長・役員、住民などへのインタビュー調査を行い、それをもとにグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて明らかにしている。それによれば、地域や家族の支えがあり、他者との関係の中で役割を見出し、かつ将来の生活の見通しがあることによって、人生への肯定感を得られるといった関連があることを明らかにしている。

第7章では、これらの分析から得られた結論を述べている。高齢者の身体状況や置かれた環境は多様であり、高齢者をひとくくりに災害弱者と捉えることについて警鐘を鳴らしつつ、個々の高齢者の脆弱性を補うように支援の範囲を広げることによって、高齢者が必ずしも災害弱者とならないようにする災害対応を提案している。

## 論文審査結果の要旨

本研究の最も重要なメッセージは、一般的に災害弱者と言われる高齢者の状況が多様であり、ひとくくりに対応できないということである。また、個々の状況を見極めて適切な支援や災害対応を行うことによって、高齢者が災害弱者となることを防げるというものである。このメッセージは、高齢化がますます進展している我が国ならびに諸外国において災害関連死の対策の方向性を示唆する、有益な指摘であると評価できる。

これまで、建築・都市計画などの防災分野において高齢者施設の防災計画といった観点からの調査や、仮設住宅の入居者に対する調査は幾度も行われており、本研究と同様の指摘が全くなかったわけではない。しかし、本研究は分析対象を65歳以上の高齢者に限定しており、高齢者集団の中で多様性があることを示している点に特徴がある。さらに、筆者の主な研究領域である老年学分野において、災害社会科学で用いられる脆弱性やレジリエンスの概念を導入して、綿密なエビデンスに基づく考察を行っている点には十分に新規性があると認められる。

他方で、超高齢社会の進行に伴い、社会として介護保険制度の創設や高齢者の脆弱性をサポートする体制が急速に進展してきている時代背景や歴史的な経緯への理解が不足している部分も見られた。そのため、本研究のオリジナリティに関する論点が弱く感じられるところも見られる。こうした側面があるが全体として、本研究の新規性や価値を損ねるものではなく、本論文は博士論文として価値あるものと認められる。